

『アーレントのマルクス——労働と全体主義』

百木獏〔著〕, 2018年, 人文書院.

〔評者〕

北野亮太郎

KITANO Ryotaro

本書は、ハンナ・アーレントのカール・マルクス批判を再検討することで、労働と全体主義の親和性を明らかにすることを目的としている。まず著者は序章において、近年、アーレントの思想が流行していることを示す。2000年以降、遺稿が立て続けに出版されたことが大きな理由として挙げられている。しかし、著者はそれだけではないと考える。むしろ、アーレントの思想が現代という時代に深く共鳴するところがあるからではないか。そして、労働と全体主義の親和性を証明できるならば、新自由主義がグローバル経済を席卷するある種「労働至上主義」的な今日において、アーレントの考察は危機を乗り越える思想構築の重要な手掛かりとなるはずである。そうした今日的危機意識が本書の全体を支えている。

アーレントの労働思想を考える際、そのマルクス研究、マルクス批判は欠かすことができない。本書はアーレントのマルクス解釈、特に労働思想への批判が、アーレントの全体主義の議論にどのような影響を与えたかを軸として展開される。

まず第一章にて『全体主義の起源』と『人間の条件』という、一見直接的関連性を持たないように思われる著作を、アーレントのマルクス研究を媒介として関連付けようとする。この解釈は、上記の二つの著作が出版される間にアーレントがマルクス研究に没頭していたことと、近年『カール・マルクスと西欧政治思想の伝統』というタイトルで刊行された当時の草稿によって根拠づけられる。

続く第二章では、アーレントの労働思想に対する先行研究の解釈と、アーレントが行ったマルクス労働思想の批判、そしてそれに対するマルクス研究者側からの再批判の確認がまず行われる。

アーレントはマルクスに対し、労働を賛美した思想家として批判を行った。しかし著者は、そもそもマルクスは労働の賛美者ではなかったという再批判を主軸に、アーレントとマルクスの労働思想のむしろ親近性を検証している。マルクスは本来、資本主義的な疎外された労働をむしろ厳しく批判した思想家であった。そして労働者が自発的に運営するアソシエイト

された労働こそ肯定されるべき労働だと論じた。資本主義的な疎外された労働は必要によって支配され、労働者の孤立を促してしまうことを問題化している点で、アーレントの労働思想と近いものである。しかし、アーレントはその近似性に目を向けずマルクスを徹底して批判した。その時に持ち出されるのがマルクスの「労働する動物」という人間の定義である。これは人間の行為すべてを労働という領域に引き込むことを可能にし、近代社会のキメラ化した労働が出現するに至る思想的な根拠となる。アーレントが真に批判対象としていたのは近代の労働の肥大化である。そのような目的を持ちながらマルクス研究を行ったことからマルクスの労働思想への誤読が生じてきたと著者は論じる。

第三章では労働に関連して政治と余暇の問題を扱う。アーレントはマルクスの議論を人間を労働と政治から解放することを求めるものとし批判した。しかしそこにも根本的誤読が含まれる。労働者を官僚的機構によって管理し、労働者を政治領域から解放することを主張したのはマルクスではなく、マルクスから派生したエンゲルス、レーニンなどの思想であるからだ。

共産主義国家での共産党独裁体制と官僚制は、そもそもマルクスが至上と考えていたアソシエーションによる自主的統率とは異なる。むしろアーレントとマルクスは、資本主義社会では私的な関心が労働と消費に支配され、この労働と消費の無限サイクルが社会を腐敗させるという考えにおいては共通していた。これに対してアーレントは、資本主義に内在する膨張性を根拠として全体主義との関連性から批判を行い、マルクスは資本主義とは別種の労働体制を模索した。そういった問題意識の違いが、それぞれの理論が対立する部分を発生させる。

第四章では社会の「自然なものの不自然な成長」を主軸に論じている。アーレントにとって社会とは国家大に拡張された家族である。家族は私的領域、つまり生存をつかさどる自然に支配された範囲として規定されている。その領域が国家全体に拡張されるということは、西洋思想が伝統的に私的領域として扱ってきた経済的な問題が、国家全体の関心事となるということである。

では社会に含まれる自然的な要素とは何か。それは円環的な運動である。アーレントの考察では動物や自然物の生は種の循環的なものとして捉えられている。人間も生きている以上、種の循環としての生を持っているし、人間も生命維持や生殖といった必要の循環の中で生きていることに変わりはない。そしてその自然的な部分の膨張が発生するということは、人間の動物化が行われるということにほかならない。そしてその動物化の先にアーレントは全体主義の出現を見ていた。政治においても私的で自然的な興

味が最大関心事となり、経済も含め、人間の生存それ自体を目的とした体制に代わってくる。そうなると政治が引き受ける業務は管理に代わり、大衆の画一化が起こる。こうして人間の政治参加は失われ、人間の多数性を基盤とする公的領域が崩壊する。人間は孤立し、社会は余計者を生み出す。

第五章ではその余計者を処理するシステムとして帝国主義が登場したことを論じ、帝国主義が人種主義的イデオロギーと結びつくことで全体主義が発生すると述べる。資本主義の膨張運動にとって国境は障害である。また国内に余計な資本、余計な人間がたまった時に、帝国主義的な国外地域への植民が行われることとなる。イギリスやフランスのように早期に産業革命がおこった海外帝国主義では、海外の植民地化によって余計者の処理が可能であった。一方でドイツやロシアのような産業革命に遅れた国の大陸帝国主義では、資本主義的な膨張運動と国内の余計者の排除を行うために人種主義のイデオロギーを利用した。人種的な枠組みであれば国境の障害を越えることが出来ると同時に、異人種を排斥することで社会の余計者の排除を行うことが出来る。その延長として全体主義が勃興すると説く。

第六章では、労働者と政治をテーマとして扱い、労働者にも政治は可能であるということを示す。アーレントは労働者による労働運動を肯定的に評価している。労働運動といっても賃金の上昇や労働環境の改善などを求めるといったようなものではない。労働者が積極的、自発的に参加した評議会制度を高く評価したのである。そこでの労働者はイデオロギーを突如離れ、新しい政治形態について自分の考えを表明する。これによって労働者は「労働する動物」から、政治的な活動を行う人間へと変質する。しかしそのような現象を形態として維持することは困難である。その持続可能性を見出すためには、労働という消費物の生産活動を中心とした社会ではなく、持続性を持った世界を構築する仕事によって活動へ不死性を付与することが必要である。

本書の結論としては、カオス化した労働の無際限な膨張は全体主義への親和性が高く、その危機の回避として、アーレントが最も重要視していると考えられている活動よりも、むしろ世界を制作する仕事の重要性を主張する。共通世界の構築がなされなければその上に成り立つ公的領域もあり得ない。そして、アーレントの活動的生活の三要素である活動、仕事、労働がそれぞれ適切なバランスを保ち、それを維持していく必要があると結ばれる。

本書は、アーレントのマルクス誤読への批判に対し、むしろ誤読があったからこそマルクス研究を下敷きにしてアーレント独自の労働観の形成が行われたと誤読自体を肯定する。それによってアーレントの議論の妥当性を示し、現代へも適応可能な思想として再提示する。しかし結論や問題提

起に関してはアーレントの議論を補強するにとどまるものであり、新しいアーレント解釈やアーレント思想の現代的有効性に対する明確な主張には至っていない。それでも資本主義と全体主義を明確につないで見せることは、今日の資本主義社会がはらんでいる全体主義化の危機に警鐘を鳴らすには十分な主張となるだろう。